

# ブルデューの教育社会学理論の成立と その位置について

—〈プラティック理論〉と〈理論転換〉との関連で—

小澤 浩明 (一橋大学大学院)

## 1. 問題設定

本稿は、近代社会での社会秩序の「正統化」と教育システムの関連についての理論を構築するための基礎的作業として、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の社会学理論を学説形成史という限定された視角から検討することを目的とする。ブルデューの社会学理論をとりあげる理由は、ブルデュー理論が社会秩序の正統性の一部を形成する《文化の正統性 (légitimité culturelle)》のメカニズムを教育システムとの関連で解明することを試みていると考えることができるからである。しかし、本稿でただちにブルデュー社会学理論の全体像に迫ることはできない。

そこで本稿では、ブルデューの社会学理論の成立過程のなかに、彼が教育社会学理論を構成しなければならなかった必然性をさぐることに、さらにその教育社会学理論がブルデューの社会学理論全体のなかでいかなる位置を占めているのかを考察することに直接的な課題を限定する。こうした成立過程の分析は、同時にブルデューがレヴィ=ストロース以来の構造主義理論を原理的に乗り越えていく過程として素描されることになる。

ところで、こうした課題設定の基底には二重の問題意識がある。まず第一には、ブルデュー社会学理論の受容がある種のバイアスをもっていたことに関わる。ブルデューの社会学理論には対立する2つの評価がある。ひとつは、文化による社会階級の再生産メカニズムを体系的に解明した「文化的再生産」論であるという肯定的評価。もうひとつは、この再生産理論は、変動論のない非常

にスタティックな理論であるという否定的評価である<sup>(1)</sup>。このように評価が両極に分かれる分岐点は、ブルデューの社会学理論を「文化的再生産」論と固定したうえで、それにたいする肯定と否定にある。言い換えれば、「文化的再生産」論は、教育システムが《文化資本》なるものを階級ごとに不平等に分配し、地位の代代的再生産をおこなう結果として、社会階級を再生産するという道具主義的なイメージをわれわれに与えたが、このイメージにたいする同意や反発がこれらの評価の基底にあるといえる。そうした意味では、両評価は「文化的再生産」論をめぐる「認識論上のカップル」になっているといえよう<sup>(2)</sup>。私見によれば、ブルデュー社会学理論を「文化的再生産」論と解釈し、その枠に閉じ込めたこと自体が問題であったと考える<sup>(3)</sup>。これらの両評価はいずれも1970年に書かれたブルデューの教育社会学理論の中心的著作である『再生産—教育システムの理論のための諸要素』（パスロンとの共著）にその多くを依拠している点が特徴である。しかし、それらはつぎの2点において共通の弱点をもつものである。

- ①『再生産』を〈プラティック (pratique) 理論〉との関係で十分に位置づけていないこと。
- ②ブルデュー自らが言う〈理論転換 (conversion)〉が1970年以降に完成されたという事態を看過していること。

こうした従来の評価とその弱点を克服するためには、いったんブルデューの社会学理論の成立過程の出発点に立ち戻り、学説形成史的視角からブルデュー社会学理論を論じてみる必要がある。とりわけ、『再生産』に代表されるブルデューの教育社会学理論の成立を彼の社会学理論全体との関連で問うことが要請される。これが本稿の課題設定の第一の問題意識である。

第二には、近代社会の社会秩序の「正統化」を扱う社会学理論がどうしても教育システムの理論を要請する必然性の典型的な一例を、ブルデューが教育社会学理論を構築する発展過程のなかに読み取ることは、教育社会学の学的性格を明確にすることにつながると考えるからである。久富善之は、マンハイムなどの教育社会学の「創設者たちにおける社会学から『教育社会学』への過程は、[教育事象への既存の社会学的方法]『単なる適用』とみるよりはむしろ、ある社会認識 (= 社会学理論) がある教育認識 (= 教育理論) を必然的契機として内包した過程、として見られるべきである」[久富善之1972, 118頁の補足は引

用者]とし、教育社会学の独自の課題を「教育の社会性」の解明に求めた。久富によれば、「『教育の社会性』認識(略)は元来それじしんの中に近代社会批判を内包したところの奥行の深い『社会性』認識だった」[久富善之1985, 141頁]ということになる。本稿でブルデューにおけるこの「内包した過程」を描き出すこともまた、彼の教育社会学理論の学的性格を浮き彫りにし、とりわけブルデューの「教育の社会性」認識を明らかにすることになる。ブルデューの場合、「教育の社会性」が内包する近代社会批判は社会秩序=象徴秩序の「正統化」の解明として照射されることになるだろう。これが課題設定の第二の問題意識である。

さて、本稿ではとりわけブルデューが構造主義理論に基づいてアルジェリアで研究していた段階から、〈理論転換〉を決意して教育社会学へ本格的に移行した必然性を捉えることで、教育社会学への研究の重点の移行が彼の社会学理論の成立過程にいかなる役割を果たしたのかを考察するが、その課題はブルデュー受容の弱点に関わって、まずは『再生産』をブルデューの教育社会学理論の発展と〈プラティック理論〉の発展の両方の過程に位置づけることである。つぎに『再生産』以降の理論的發展に構造主義理論からの〈理論転換〉の完成を確認することになる。

ブルデュー社会学理論の成立に関する本稿の仮説はつぎの3点である。

- a. 〈理論転換〉とは、構造主義理論(そのいくつかの前提からの決別(rommpre)を含んだ)の乗り越えであり、それは1970年代後半に完成する。
- b. ブルデューの〈プラティック理論〉は、教育社会学理論と結節することで《ハビトゥス》理論として本格的に成立する契機を得る。
- c. 〈プラティック理論〉は、〈理論転換〉によってある種の変動論を含む《象徴闘争》論を成立させる。

こうした仮説を検討するために、ブルデュー社会学理論の成立過程をつぎの3つの時期に区分する(表1参照)。

表1. ブルデューの研究活動の時期区分

| 区分        | 年代   | 活動の特徴             | 著作/主要論文   | 著作/論文の特徴                              |
|-----------|------|-------------------|---|---------------------------------------|
| 〈アルジェリア期〉 | 1958 |                   | 『アルジェリアの社会学』  |                                       |
|           | 1959 | 構造主義に対する疑問        |   |                                       |
|           | 1961 | 教育と文化の調査開始        |   |                                       |
|           | 1962 |                   | "Célibat et condition paysanne"                                     | 「主観」と「客観」の和解                          |
|           | 1963 | 構造主義者としての最後の論文執筆  | 『家または転倒した世界』<br>『アルジェリアの労働と労働者』<br>『デラシネモン』                         | “身体”への着目<br>「主観的期待と客観的可能性」            |
|           | 1964 |                   | 『遺産相続者たち』   | 初めて《ハビトゥス》概念が登場<br>教育社会学のはじめての書       |
| 〈理論転換期〉   | 1965 | 《全的人間学》構想         | 『写真論』   | 《ハビトゥス》が理論の中心に<br>《文化の正統性》概念が初登場      |
|           | 1967 | 教育社会学研究と慣習行動理論の結節 | 「生成文法としてのハビトゥス」<br>"Système d'Enseignement et<br>Système de Pensée" | パノフスキーの影響<br>学校教育が心的構造に影響を与えることを定式化する |
|           | 1970 | 教育社会学理論の総括        | 『再生産』   | 象徴支配の社会学への展開                          |
|           | 1972 | 再びカピールの研究へ        | 『プラティック理論の素描』   | 「戦略(stratégie)」概念の登場                  |
| 〈確立期〉     | 1976 | 〈理論転換〉の完成         | "Le sens pratique"  | 《実践感覚》概念の初登場                          |
|           | 1977 |                   | "Sur le pouvoir symbolique"   |                                       |
|           | 1979 |                   | 『ディスタクシオン』  | 現代フランス社会の分析                           |
|           | 1980 | 《象徴闘争論》の確立        | 『実践感覚』  | カピール研究の最終的総括                          |
| 〈展開期〉     | 1982 |                   | 『話すということ』   | 構造主義言語学理論の理論的総括                       |
|           | 1984 |                   | 『ホモ・アカデミックス』  | 大学への《場》理論の適用                          |
|           | 1989 |                   | 『国家貴族』  | 教育社会学の第3番目の書                          |
|           | 1992 |                   | 『芸術の規則』   | 《場(champ)》の理論                         |

〈アルジェリア期〉(1958～1964) ……ブルデューがアルジェリアで研究をはじめてから、1964年まで。

〈理論転換期〉(1965～1975) ……《全的人間学》の構想から1975年まで

〈理論確立期〉(1976～1980) ……《実践感覚》概念の登場から『ディスタクシオン』、『実践感覚』が書かれるまで。

〈理論展開期〉(1981～ ) ……『実践感覚』以後

以上が大まかな時期区分である。この区分とは別に本稿で中心的に扱う教育社会学が集中的に研究された期間、すなわちはじめての教育社会学に関する著作である『遺産相続者たち』が出版された1964年から『再生産』が出版される1970年までを〈教育社会学研究期〉として下位区分する。

この区分じだいがまずもって論争的であり、議論の俎上へのせられるべきである。しかし、ブルデューの研究過程を時間系列で区分し、それを検討してゆくスタイルの論文は日本にはまだない<sup>(4)</sup>。したがって、この時期区分に関しては批判を待つことにして、本稿では次のように最初の3つの時期に関して論を展開してゆく。2節では〈アルジェリア期〉から1965年の《全的人間学》の構想までを扱う。3節では下位区分した〈教育社会学研究期〉を中心に扱う。4節では『再生産』以後の〈確立期〉と〈転換期〉における〈理論転換〉の完成と《象徴闘争》論の成立までを扱う。5節では教育社会学理論の位置の確認と今後の課題を扱う。

## 2. 構造主義理論の受容と超克—〈アルジェリア期〉から 《全的人間学》構想まで

### (1) 構造主義への認識論的批判

〈アルジェリア期〉には、ブルデューは構造主義理論、とりわけその認識論的な基礎である「関係的思考様式 (le mode de pensée relation)」—「幾何学的な姿を相互関係のなかで考える代わりに実在の存在のなかで思い浮かべる」

[Bourdieu Pierré 1968, p. 682] 実体論的思考様式に対して、「ひとつのシステムのなかで各要素の性格をお互いに結合する諸関係、また各要素がそこからその意味と機能を取り出す諸関係によって、各要素の性格を規定する」[1980 a, p. 11/訳書1988, I巻6頁] 思考様式—を用いて、アルジェリアの社会分析や儀礼研究を進めていた。この思考様式は、〈理論転換〉の後にも、一貫し

てブルデューの社会学理論の認識論的な前提となるものである。構造主義の立場にたったブルデューは1963年に「家あるいは転倒した世界」[ibid. pp.441-461/訳書1990, II巻211-231頁]という論文を書く。この論文で、ブルデューは慣習行動＝プラティックを方向づける「秩序づけ原理」を身体の側に求め、後の《ハビトゥス》理論への端緒を開くことになる。

ところが、この〈アルジェリア期〉は同時に構造主義のいくつかの前提を再考せざるえない契機を内包する過程でもあった。具体的に述べるならば、ブルデューは、①儀礼研究の領域、②婚姻研究の2つの領域において、プラティックを規制している〈論理＝無意識〉を想定する構造主義理論にたいしてつぎのような疑問を抱くようになった。

①の領域で、ブルデューはプラティックのなかに常に首尾一貫した理論を探し求める、構造主義につきまとう「汎論理主義」にたいする疑問を深めてゆく。つまり、「儀礼の論理を構成する一連の対立のシステムは、ある程度までは一貫して論理的なものであったが、そうした対立のシステムだけでは収集されたすべてのデータを統合できないことが明らかになってきた」[1987, p.18/訳書1988, 17頁]のである。

また②の領域では、1959年の婚姻調査で従来その社会で典型的といわれた「平行イトコ婚」がほとんどなりたっていないということが確認された。そのことは「観察者の認識論的特権」が行為者のプラティックの論理を正確に把握するのを妨げているのではないかという疑問になる。こうした二領域での疑問はともに、構造主義の立場にたった観察者がつくるプラティックについての〈論理〉モデルと行為者の現実の慣習行動の原理に間にズレが存在するのではないか、という問題意識に切り結ばれてゆく。これはすべての「客観主義的理論」のもつ認識論的な前提にたいして再考を要請することになる（「客観化の客観化」の契機）。

こうした問題意識は、ブルデューにとっては構造主義理論のある種の「限界」を示唆するものであった。これを契機として、ブルデューは構造主義理論のパラダイムを乗り越え、独自の〈プラティック理論〉の形成を決意することになる。ブルデューはこれを「行為と社会的世界の考え方すべてにおける転換 (la conversion de toute la vision de l'action et du monde social)」[1980 a, p.32/訳書1988, I巻26頁]と呼んだ。本稿で、〈理論転換 (conversion)〉

と定式化しているのはこれをさす [仮説 a. の前半]。ブルデューはこの転換過程がとてつ長い道程であったことを告白している [ibid./同上]。本稿ではこの長い転換過程を素描することで、ブルデューの社会学の方法論の深化のプロセスを浮き彫りし、その理論の本質を把握することが目的となる。

さて、1962年段階ではブルデューは先の問題意識にたいしてつぎのような解決策を提起している。「社会学の第一の課題は、おそらく全体性を構築することである。そのことから出発して、社会システムについて個人がもっている主観的意識とこのシステムの客観的構造についての統一性が発見される。社会学者は、一方では社会的事実についての自発的意識、つまりもともと熟考されていない意識を手に入れ、それを理解しようと努力する。他方では、その事実について考えるために『社会に関わる』(《agir le social》)ことを放棄する観察者の状況が与える特権によって、事実の的確な性質を把握しようと努力する。それゆえに、社会学者は分析によって発見された客観的データの真理とそれを体験する人々の主観的確信とを和解 (réconcilier) させる義務がある」[1962, pp.108-109]。つまり、この段階のブルデューは独自の理論形成の課題を、いったんは区別された形で把握された、行為者の「主観」と観察者が把握する「客観」とを最終的に統合できる社会学理論の創出として提起する。こうした理論の形成へ向けて、ブルデューは1963年に「主観的期待と客観的機会」(espérance subjectives et chances objective) という認識枠組みを提起し、研究をさらに展開することになる<sup>(5)</sup>。

## (2) 「主観的期待と客観的可能性」から《ハビトゥス》へ

この認識枠組みが、構造主義理論にたいする認識論的な乗り越えの企図を含んでいることは1970年の言説のなかに確認できる。「主観的期待と客観的可能性 (probabilité) は行為者の観点と科学の観点、すなわち客観的規則性を武装した観察によって構成する科学の観点に区別されるのである。(略) ここでは、客観的規則性は主観的期待のかたちをとって、内面化されていること、そしてその期待は客観的可能性の実現に貢献するこれらの客観的行為のなかに表現されていることが指摘されようとしている。したがって、構造から出発してプラティックを説明するという観点に立つか、それともプラティックから出発して構造の再生産を予測するという観点に立つかによって、この弁証法のなかでは第一の関係をとくに重視するか、第二の関係をとくに重視するかという相

違に導かれてゆく」[1970, p. 190/訳書1991, 262頁]。こうしてみると、ブルデューの構造主義にたいする批判の核は、プラティックから構造を説明すること、つまり行為者(agent)の経験=「主観」から客観的状况を説明することであり、それは事実上、客観的記述に行為者を組み込むことになるのであった[1965a, pp. 17-18/訳書1990, 2頁]。

1965年には、〈プラティック理論〉をアルジェリアの労働者の調査や次節でみる教育調査の結果をふまえて《全的人間学une anthropologie totale》として具体化する。ブルデューはそれをつぎのように定義する。「要するに、全的人間学は、客観性が主観的経験の中に、その経験を媒介として根を下ろしてゆく過程分析として自らを成就せねばならない。この学は主観的経験を包括することで客観主義の契機を乗り越え、内在性の外在化と外在性の内在化の理論にその契機を基礎づけねばならない」[1965a, p.21/訳書1990, 6頁]。具体的には、《全的人間学》は主観的意識と客観的可能性のあいだに想定されることになる《ハビトゥス》を把握することによって可能となる。「客観的規則性の体系と直接観察可能な行動の体系との間には、ハビトゥス以外の何ものでもない一種の媒介項が常に介在している」[1965a, p22/訳書1990, 7頁]のである。

ブルデューによれば、1965年の段階での《ハビトゥス》概念は、①諸性向(思考・知覚・行為の無意識な図式)の体系、②構造の内面化、③プラティックの産出原理、④客観的諸関係と主観的な企図との幾何学的な場として想定されていた。つまり、《ハビトゥス》は、客観的状况が行為者に身体化されたものであると同時に、慣習行動を生成する産出原理として見いだされた。いまやこの《ハビトゥス》を把握する理論を形成することが、構造主義理論にたいする疑問の解決の直接的な課題となり、さらには「主観主義と客観主義が勝手に作り出す架空の対立の止揚」をも射程に入れることになるのである<sup>(6)</sup>。

### 3. 教育社会学理論への移行と〈慣習行動理論〉 との結節…〈教育社会学研究期〉

#### (1) 教育社会学・文化社会学への移行

1960年代前半にブルデューは、アルジェリア社会と文化の研究からの「移行」として、つまり文化的プラティックの分析の一貫として、フランスの教育と文化の社会学的研究を行なっている。こうしたフランスでの教育・文化の社会学

的研究が、1965年の《全的人間学》の企図の成立を準備することになる。ここでは、移行の状況とその簡単な内容を時間を遡って整理しておく。

ブルデューは1961年と1962年の2回にわたり教育についての調査を行なっている。そのまとめについては、2つの報告書—『学生とその勉学』(1964)、『教育的関係とコミュニケーション』(1965)—が出されている。さらに、1964年には、ブルデューは「主観的期待と客観的可能性」の枠組みを援用して、はじめての教育社会学の著作である『遺産相続者たち』(パスロンとの共著)を書いた。そのなかでブルデューは、高等教育システム内部に、文化的不平等にもとづく能力の差を「生れつき＝自然の」能力差であるかのように転換する《天賦の才のイデオロギー》が貫いていることを暴露し、このイデオロギーが《文化資本》の相続を隠蔽する作用をもっていることを明らかにした。さらにそれを通じて、当時のフランスの左派に信奉されていた、「低い」階級の出身者も教育しだいで「高い」階級に移動できるという「解放する学校のイデオロギー」を批判すると同時に、「社会的に条件づけられた文化的不平等から得られた知識とその不平等をなくそうとする決意に従う」[1964b, p. 112]《合理的教育》の確立を提唱するのである。

このような教育調査や教育社会学の研究をおこなう一方で、1963年には本格的な文化に関する調査をはじめており、その成果は『写真論—写真の社会的エッセー』(1965)や『芸術愛好—美術観と観客』(1966)として出版された。ブルデューはこうした文化社会学を通して、文化とそれに関するすべての行為は社会に存在する《文化の正統性》によって序列化されていることを発見した。

《文化の正統性》概念はつぎのように定義されている。「要するに、私が文化の正統性 (légitimité culturelle) と呼ぶものの存在は、すべての個人が、それを望むと望まざるとにかかわらず、またそれを容認するとせざるとにかかわらず、自らの振る舞いに、文化の関係下で資格を与え、序列づけすることを可能にするような規則体系の適用範囲内に自分がおかれており、またそのことを知っているという事実において成り立っている」[1965a, p. 135/訳書1990, 374頁]。

『芸術愛好—美術観と観客』では、正統な作品に関する趣味の体系に示される《正統性》と教育水準とが関係していることが明らかにされた。つまり、《文化の正統性》が「序列づけ (hiérarchiser)」を行うのは、学校によって

組織され、教え込まれる知識の体系を通してであることがあきらかにされたのである。すなわち、「正統性の領域の性質を分与されている意味作用すべてに共通している事実は、それらの意味作用は組織され段階づけられた知識を習得と鍛練の方法的組織化を介して伝達することを特に任務とする機関つまり学校によって、訓練され、教え込まれた特殊な型の体系に従って組織されるということである。(略)別の言い方をすれば、正統な作品に関する趣味の体系は教育の水準と密接に関わっている」[1965a, p. 136/訳書1990, 118頁]のである<sup>(7)</sup>。したがって、いまや《文化の正統性》は、教育システムとセットで考察される必要があることが確認される。

(2) 教育・文化社会学研究と〈プラティック理論〉との結節から『再生産』へ  
1965年にブルデューが「全的人間学=プラティック理論」の成立を決意し、《ハビトゥス》理論を完成させようとするのはすでにみた。1967年には、ブルデューは「全的人間学=プラティック理論」の形成と教育社会学研究を結節させる。この結節は、「全的人間学=プラティック理論」が《ハビトゥス》概念を中核にしていたことの必然的な結果であった。

パノフスキーが『ゴシック建築とスコラ思想』において、「象徴形式」に歴史的視点を導入したことを評価しながらも、その批判的検討[1967a/訳1986]を通じて、ブルデューは《ハビトゥス》を行為者に内面化する主な要因が社会的出自(家庭教育)と教育システム(学校教育)にあると認識し、とりわけ「文字のある社会」では学校教育が《ハビトゥス》に与える影響が大きいことを見て取るのである。「原始宗教のように、学校文化は諸個人に、個人間のコミュニケーションを可能にする思考のカテゴリーの総体を教え込む」[1967b, p. 387]ことが述べられている1967年の「教育のシステムと思考のシステム」論文では、「文字をもつ社会においては、心的構造は学校制度によって植えつけられるということ、学校組織の諸区分が分類(classification)の諸形式の根源になる」[1987, p. 35/訳書1988, 42頁]ことが示された。つまり、《ハビトゥス》形成の一般理論を構築するためには、教育の社会学的研究が必要不可欠となるのである[仮説b.]。ここにブルデューが「教育システムと階級構造のあいだの諸関係のシステム」[1970, p. 9/訳書1990, 8頁]の分析である教育社会学研究に本格的に移行する必然性が存在するのである。この必然性を内包する過程が意味することは、彼の教育社会学理論がたんに教育の社会学

的研究のためにあるだけでなく、それが彼の社会学理論の全体のなかで非常に大きな位置を占めているということである。

以上のことから、1970年に書かれることになる『再生産』は、一方で《ハビトゥス》の形成という〈プラティック理論〉の基礎理論として、他方で教育社会学の理論として読まれる必要があることになる。そうした意味では、文化的プラティックの分析の一貫である『遺産相続者たち』と『再生産』の間には、連続面と飛躍を含んだ非連続面の両方が存在することを確認しておこう。

まとめるならば、『再生産』が書かれた動機は次の3点である（と推測できる）。

① 《ハビトゥス》形成の一般理論の構築…『再生産』では《ハビトゥス》は「文化の恣意性 (arbitraire)」の諸原理が内面化された所産であると定義される [1970, p. 47/訳書1991, 52頁]。

② 教育社会学理論の構築…『遺産相続者たち』で示された《天賦の才のイデオロギー》や「文化的不平等」についての教育社会学理論からの解明。

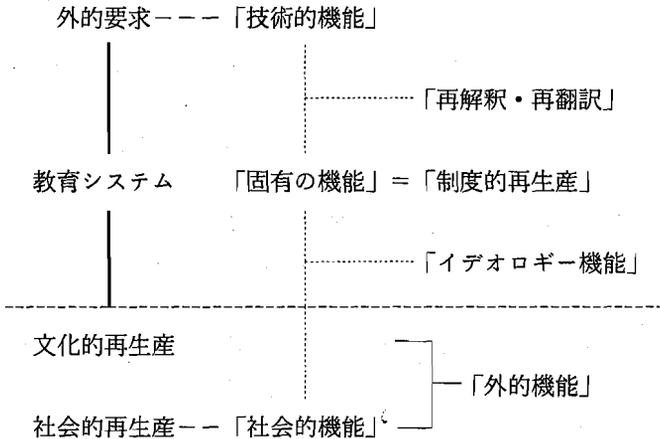
③ 文化社会学で提示された《文化の正統性》の考察のための基礎理論…各集団・階級の「文化的恣意性 (arbitraire)」の体系が序列化され、その支配的な恣意性が表象されたものが《文化の正統性》に関係している。こうした意味で、《文化の正統性》の考察の一端は「文化的恣意性」の教え込み理論にあるといえよう。

### (3) 教育社会学理論の地平

こうした3つの契機をもちながら切り開かれた『再生産』は、a)《教育システムの相対的自律性の分析》であると同時に、b)《象徴支配の社会学的分析》である。

教育社会学の領域から導かれた問題意識は、《天賦の才のイデオロギー》が典型であるように教育システム内部に関わるものである。しかし、こうした階級差に基づく文化的不平等が貫く、教育システム内部の現実を理論的に分析するためには、教育システム内部の考察だけでは充分でないため、どうしても社会階級関係の分析との関連において教育システム内部を分析する必要があった。教育システムの諸機能を図1を参照しながら説明しよう。

図1. 教育システムの諸機能



ここで示された外的要求とは、官僚機構の形成や企業人の育成などを典型とする社会・経済的要求のことである。教育システムは、社会・経済的要求やその要求の背景となる社会変動によって直接的に規定されるのではなく、それをシステムの内的な論理に「再解釈・再翻訳」する機能をもつ。したがって、「学校システムは、自らの再翻訳 (retraduction) の力 (相対的自律性と相関している) のために、形態学的変化とそれが目にみえない形であらわしているいっさいの社会変動を、もっぱら教育方法上の難問というかたちで経験する」[1970, p. 126/訳書1991, 131頁] ことになる。これは教育システムの相対的自律性に相関する存在する重要な機能である。

一方で、教育システムは、システムに固有の手段をもちいて「制度の自己再生産」を行なわなければならない機関である。教育システムは、発信者 (教師) のもつ文化的恣意の諸原理にできるだけ適合した《ハビトゥス》をもった正統的な受信者 (支配階級出身者に多い) の再生産をおこなうことで「制度の自己再生産」を果たす。これを教育システムに「固有な機能」とブルデューは呼ぶ。この正統的な受信者の再生産のために持ち出されるのが、たとえば《天賦の才のイデオロギー》である。あるいは、教育システムは試験の選別などによって、非正統的な受信者 (民衆階級出身者に多い) を〈排除〉 (試験による排除・自己排除・延期された排除=留年) することで、逆に正統的な受信者を確保する。

ところで、学校文化は支配階級の文化と大部分が重なっているので、《ハビトゥス》の選別による正統的な受信者の再生産は、結果的に支配階級のもつ支配的「文化的恣意性の再生産」(=これがブルデューの言う《文化的再生産》)を意味することになる。こうした《文化的再生産》(と「社会的再生産」)を「外的機能」と呼ぶ。つまり教育システムは「制度の自己再生産」という「固有の機能」を果たすことで、《文化的再生産》という「外的機能」を暗黙のうちに遂行するが、この「暗黙の一致」が教育システムが社会的条件から自律しているかのように思わせる「中立性のイデオロギー」を生むことになる(「イデオロギー機能」)。ここに《教育システムの相対的自律性》、つまり「独立による従属」なるものが成立する。

こうしたモチーフのうえに、『再生産』では文化社会学から発したのが問題意識である《文化の正統性》の問題が重ねられている。先の調査結果から明らかのように、《文化の正統性》の問題は教育システムの問題とセットで考えられるべきであった。ブルデューによれば、教育システムによる《文化的再生産》は、同時に《文化の正統性》の再生産を意味しているからである。

ブルデューは、「正統性とは、何かが見落とされていること(méconnaissance)を意味する」[1980b, p. 255/訳書1991, 328頁]と定式化している。この文脈では、階級関係が見落とされていることになる。「およそ象徴暴力を行使する力、すなわちさまざまな意味を押しつけ、しかも自らの力の根底にある力関係をおおい隠すことで、それらの意味を正統であるとして押しつけるにいたる力は、そうした力関係のうえに、それ固有の力、すなわち象徴的な力を付けくわえる」[1970, p. 18/訳書1991, 16頁]。この命題は、つぎのことを意味している。すなわち、相対的自律性をもつ「制度化された教育システム(SE)」は階級関係を基礎としながらも、それを《誤認(méconnaissance)》させる「中立性のイデオロギー」のもとで、「文化の恣意性」の内面化である《ハビトゥス》を再生産することが、その文化を「正統的」であることを教え込むと同時に、教え込みの力の基礎である階級関係それじたいを「正統的」とすると《承認(reconnaissance)》させるのである。近代社会において《文化の正統性》という社会秩序に関わる問題を分析するためには、この社会では教育システムが正統文化を制度化しているがゆえに、教育社会学理論が要請されることになる。ここに教育社会学理論に内在的なかたちで、《象徴支配の社会学》が展開

される理由がある。

ブルデューはかかる象徴支配のメカニズムを「文化的再生産 (= 文化的恣意性の再生産) を通じた社会的再生産」として定式化する。このテーゼは、教育システムを介した《文化の正統性》の「再生産」が社会階級間の支配関係を「再生産」するのに「寄与 (cotribuer)」する、ということの意味している。ところが、『再生産』では《文化の正統性》の再生産がいったいどのように社会階級の再生産に寄与するのか、その内実が明確に説明されていない (予定調和である) という弱点がある。この説明不足が、教育がただちに社会階級を再生産するかのようなイメージをつくりあげることになる。さらに、こうした弱点を加えて、ブルデューの理論がスタティックな理論であると批判されることになる2つの本質的な弱点が存在する。

① 『再生産』で展開される〈プラティック理論〉が、事実上構造からの《ハビトゥス》の規定という動的な規定過程のメカニズムのみを把握する理論になっていること。言い換えれば、《ハビトゥス》によるプラティックの産出の側面が示されていないこと。

② 《文化の正統性》、あるいは「象徴秩序」の変動が説明されていないこと。つまり、「客観的記述のなかに行為者の経験を組み込もう」とする〈プラティック理論〉本来の企図に照らすならば、この2つの弱点のために1970年時点での〈プラティック理論〉は理論的に不徹底であったといえよう。このことがブルデューの理論が「スタティック」であるという批判に一定の根拠を与えることになっている。ブルデューはこうした弱点を後に展開する「表象 (répresentation)」論の導入による〈理論転換〉の完成によって乗り越える、というのが筆者の見解である。

#### 4. 理論転換 (conversion) の完成と象徴闘争論…『再生産』以後の〈転換期〉と〈確立期〉

##### (1) 理論転換の完成

〈理論転換〉の完成とは、端的に言うならば、社会的世界を「行為者に対して超絶した、行為者の相互作用に還元できない客観的諸関係の空間」[1987, p. 18/訳書1988, 17-18頁]と想定していた従来の構造主義的な認識から、社会的世界は行為者を規定するが、同時にその社会的世界はまさにその行為者によっ

て構築された世界であると認識する立場への〈転換〉を意味している。言い換えるならば、生成過程を忘却した (l'amnésie de la genèse) 共時的な構造＝象徴秩序分析に、生成過程と再生産過程を導入し、さらに闘争による「卓越化＝差異化の累積過程」を導入することだといえる。しかし、こうした認識枠組みを社会科学理論として構築するためには、いままでの《ハビトゥス》理論をさらに深化させなければならなかった。そのために、1970年代にブルデューはもう一度アルジェリアの研究の総括に立ち戻る。その総括は、1972年の『プラティック理論の素描』と1980年の『実践感覚』にみられる (1977年には『プラティック理論の概要』という英語版)。アルジェリア研究の再検討から、ブルデューが新たに発見したのは、「戦略 (stratégie)」と《実践感覚 (le sens pratique)》概念に示される事実にある。

「戦略」概念は1972年の『プラティック理論の素描』に登場する。これは婚姻研究の再検討から導かれた。この概念は、構造主義が描くような単に〈規則〉にしたがう「行為」把握に対して、行為者が無意識でありながらも、状況を読み取りながら再生産行為を行っている事実から導かれたものであった。「戦略」の概念は、客観主義的視点と、さらに構造主義が想定している行為者なき行為に対して手を切るための用具である」[1987, p. 79/訳書1988, 101-102頁]。つまり、それは行為者が所与の状況内で自己の社会的位置を再生産する行為が、意識的・合理的な計算によるのではなく、《ハビトゥス》によって無意識に行なわれていることを示している。

《実践感覚》概念は、1976年に登場する概念である。《実践感覚》とはある〈場〉で行為者がその場になつた (日本語でいう「センス」ある) 行動を選択する感覚を示す概念である。「戦略」が「再生産」の事実を説明するタームであるならば、《実践感覚》は「正統性」を獲得する「卓越化 (distanction)」のゲームを説明するタームであるといつてよい。

これら両概念は、基本的にはブルデューのこれまでの《ハビトゥス》の概念と重なる内容を示すものである。にもかかわらず、ブルデューがこれらを新たに創出した背後には〈理論転換〉の完成のための必然性が存在した。両概念に特徴的なことは、ブルデューのこれまでのハビトゥス理論が『再生産』で《ハビトゥス》の規定という客観主義的な側面の説明にとどまっていた地点 (先の弱点) から進みでて、行為の産出という事実を観察し、その主観的経験の領域

を説明可能に(=理論化)したところにある(行為者の主観性領域のいっそうの強調)。1980年の段階では、《ハビトゥス》はつぎのように定義される。

《ハビトゥス》とは「持続性をもち移調が可能な心的諸性向のシステムであり、構造化する構造として、つまり慣習行動と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造である」[1980a, p. 88/訳書1988, I巻83頁]。ここで特徴的なことは、《ハビトゥス》が「表象(représentation)」の産出原理でもあるという点である。ここに《ハビトゥス》の決定的な変容が見て取れる<sup>(8)</sup>。

こうした「表象」世界の変動的側面の観察によって、ブルデューの「社会的世界」の認識は構造主義の固定化した「社会的世界」認識と異なってくる。つまり、ブルデューは「社会的世界」に行為者同士が生み出す「表象(représentation)」の世界を導入することによって、そこでの「闘争」を射程に入れ、社会的世界の変動を説明可能にしたのである。こうして1970年代後半に〈理論転換〉は完成されるのである。[仮説a.の後半]

## (2) 象徴闘争と社会階級

こうしてブルデューの社会学理論は再生産理論のみならず、表象論を含み込むつぎのような《象徴闘争》論として展開されることになる。「象徴闘争は、自分たちが、その関係の内でも占めている位置からくる理由で、分配が自己を表現し合法化する場であるクラス分けの仕方(classifications)を変えることによって、分配の仕方を転覆することに利益をもっている者たち、あるいは反対に、世界が押しつけてくるカテゴリーを世界に適用して、社会的世界を自然的世界として把握する疎外された認識としての誤認を永続的なものにするところに利益をもつ者たちの間で行なわれる」[1980a, p. 243/訳書1988 I巻, 232頁]。ブルデューによれば、〈社会秩序=正統性〉を形づくる「クラス分けの仕方」やアイデンティティーの正統性[1995a]は客観的世界から相対的に自律した「表象」の世界において闘争の争点となり、したがって〈秩序=正統性〉はその闘争の結果によって再編され続け、同時に単なる再生産からのズレによってつねに変動可能なものとして位置づけられるのである。

こうした《象徴闘争》論からすれば、社会階級関係は次のような「動態(dynamique)」をもつものとして描かれる。ブルデューの定義によれば、社会階級は、①文化資本と経済資本の量、②両資本の構造、③社会的軌道の3つの

次元で把握される客観主義の場である「社会空間」に、象徴闘争の結果として引かれる「境界感覚」という境界線によって区分されるものである。「境界感覚」というハビトゥスは、たとえば「場ちがい」などところに居るときにはある種の「居心地悪さ」を感じさせるものである。こうした「境界感覚」による区分は、象徴闘争の結果として〈正統性〉を勝ち得た「等級づけの原理 (classement)」が行為者に内面化された結果として各々の行為者によって表象され、確定する。つまり「闘争の中で、また闘争によってのみ、[教育システムなどによって] 身体化された境界は具体的境界になる」[1979b, p. 559/訳書1990, II巻357の補足は引用者] のである。逆に言えば、「境界感覚」は闘争によって絶えず変化する性質のものであるといえる。そうした意味で、社会学理論が把握する「社会的世界の各々の状態は暫定的な均衡、動態の一モメント」[1980a, p. 244/訳書1988, I巻233頁] であり、「階級関係の構造とは、階級闘争の場のある一状態を共時面において水平面で切りとって固定することにより得られるものである」[1979b, p. 273/訳書1989, I巻379頁] のだ。

こうした階級動態論と教育社会学理論を媒介させて、『再生産』で示されなかった「寄与 (contribuer)」の具体的内実を描くならば、次のようになるだろう。教育システムは教え込みを通じて、すでに確立された既成の「分類 (classification)」を行為者に内面化することによって〈秩序=正統性〉の再生産をめざすが、それがただちに秩序、つまり社会階級関係の再生産を意味するのではない。《象徴闘争》という〈秩序=正統性〉の変形・再編が争点となっている闘争プロセスを経て確立された、あらたな「等級づけの原理 (classement)」が行為者に内面化された結果として、はじめて社会階級関係の再生産がおこなわれるのである。そうした意味では、社会的世界の〈秩序=正統性〉は一定の変動可能性を常にもつことになる(変動理論の受容)。逆にいうならば、闘争は〈秩序=正統性〉を常に変動させながら再編し続ける「卓越化による差異化の累積過程」なのである。

もちろん実際には、この象徴闘争はすでに教育システムによって不平等に配分された「象徴資本」—闘争の持ち金=負荷 (poids) となる—をもった行為者同士の表象レベルで争われる不平等な闘争であるため、教育システムが制度化された近代社会では、この闘争は常に「部分革命」[1980a, p. 238/訳書1988, I巻227頁] でしかないのである。ここに近代社会の社会秩序を問題にす

る場合には、教育システム理論を考慮する必然性が存在するのが確認されるだろう。同時に、ブルデューはつぎのように教育システムと社会的な等級づけの関係を述べている。「教育システムは、制度化された等級づけ (classement) を操作するものであり、社会階層に対応する『レベル』ごとの区分や、理論と実践、構想と実行といった社会的分割を果てしなく反映する専攻・学科への分割により、それ自身が社会界のヒエラルキーを変形した形で再生産する客体化された等級づけのシステムである。外見上はまったく中立的なしかたで社会的な等級づけを学歴上の等級づけへと変容させるとともに、純粋に技術的な、したがって部分的で一面的なものとして経験されるようなヒエラルキーではなく、全体的かつ本性に根ざしたものとしてヒエラルキーをうちたてるのであり、こうして社会的価値を『個人的』価値に、学歴上の威厳を人間としての威厳に、それぞれ同一視させるよう人々をしむけてゆくのである」[1979b, p. 451/訳書1990, II巻213頁]。つまり、ブルデューの「教育の社会性」認識は、教育システムそれじたいが社会秩序の「正統化」に密接に関わっている地平に位置しているといえよう。

こうしてブルデューの社会学理論は、《再生産論》とともにある種の変動論を含む《象徴闘争論》をかねそなえた社会理論として成立するのである。[仮説c.]

## 5. 教育社会学理論の位置と今後の課題

1980年時点で、ブルデューは構造主義にたいする批判をつぎのように述べている。「歴史を《主体なき過程》に還元し、単純に主観主義の《創造的主体》のかわりに、自然史の死んだ諸法則に従属させられたロボットを当てる」[1980a, p. 70/訳書1988, I巻64頁]と。これにたいして、まずブルデューは主観主義に回帰しない形で行為者の経験=主観を復権することを企図した。そのためには、構造主義の共時的でスタティックな〈構造〉分析から、行為者を通じた〈構造〉の「生産・再生産・使用の社会的条件」[ibid. p. 68/同上62頁]を分析し、それを理論に導入する必要性があった。誤解をおそれずに言うならば、ブルデューは「生産の社会的条件」の分析を《場》の理論でおこない、「再生産」のそれを《ハビトゥス》形成理論である教育社会学理論でおこない、「使用」のそれを《象徴闘争》論でおこなったと考えることができる。つまり、

ブルデューが教育社会学の中心的著作に『再生産』という題をつけたのは、かかる意味においてなのであろう<sup>(9)</sup>。したがって、ブルデューの教育社会学理論は、ブルデュー社会学理論の三層構造（生産・再生産・使用）の一部分、それもいちばん基底をささえる部分に位置している、と結論づけることができよう。

本稿では、ブルデューの構造主義理論からの〈理論転換〉の過程のなかに、教育社会学理論の成立する必然性をさぐってきた。それは『再生産』をそれだけで独立した著作として読んだ場合に陥るいくつかの弱点を克服し、ブルデューの教育社会学理論のもつ「教育の社会性」認識を照射するための試みでもあった。今後に残された課題は2つある。

第一に、〈理論転換〉の完成の前後で、ブルデューの教育社会学理論それじたいはどのように変化したのかを問うことである。確かに〈理論転換〉後には「競争と教育」の関係やそれにとまなう教育システムと社会階級のダイナミックスを描くことが可能になったといえるだろう。たとえば、ブルデューは「競争と再生産」の関連についてつぎのように述べている。「…社会構造の再生産は分布状況を単に移動させるものでしかない競争のなかで、またそうした競争によって、実現される。競争というこの階級闘争の特殊形式は、被支配階級の人々が支配者たちによって提示された賭金＝争点を受け入れるとき、否応なく押しつけられてしまう形である。それは相手を組みこむ闘争であり、また最初にハンディキャップがあるという点では再生産的な闘争である」[1979b, p.184-185/訳書1989, I巻255頁]。しかし、ここでは教育システム内部のメカニズムの分析装置の変化に着目する必要があるだろう。たとえば、システムの相対的自律性と相関しているシステムの再翻訳 (retraduction)・再解釈 (réinterprétation) 機能などの分析の変化に注目する必要がある<sup>(10)</sup>。そのためには、『ホモ・アカデミックス』(1984)や『国家貴族—グランゼコールと連帯意識』(1989)などと『再生産』を中心としたいままでの著作・論文との比較検討する必要がある。

第二は、近代社会の社会秩序の「正統化」と教育システムの理論の関連を問うことに関わる。この関連を問うためのもうひとつの基礎作業として、ブルデューの「生産」・「再生産」・「使用＝闘争」の各領域の理論を明らかにする、と同時にその理論的な布置連関を描かなければならない。

## 【註】

- (1) ブルデューの社会学理論を「文化的再生産論」と総括する先行研究を肯定的評価と否定的評価に区分するならば、肯定的評価は、たとえば宮島 [1985], 秋永 [1987], 藤田 [1987] などがある。否定的評価は, Prost [1970], Carnoy [1982], 前平 [1988] などがある。
- (2) 「文化的再生産論」に伴うイメージは, ブルデューを受容した社会的条件にも関わっていると考えられる。ブルデュー理論が紹介されはじめた80年代は, 日本社会の階層分化・格差拡大の兆しがみられる一方で, 学問的には〈属性主義から業績主義への移行〉という社会移動パラダイムの説明力低下と, それにともなうSSM調査のゆきづまりが内部批判により明らかになった。こうした状況が手伝って, 「再生産」というタームがひとり歩きしたということがあるのではないだろうか。つまり, 社会移動の開放性の高い社会になっているという70年代の合意の裏返しとして, 「再生産」というタームがもてはやされたという側面があったのではないだろうか。
- (3) ブルデューをこうした「文化的再生産論」として理解することにたいする批判は, すでに高橋一郎 [1990] やHaker他 (eds.) [1990] によってなされている。
- (4) 学説形成史研究には, Robbin [1991] がある。また, フランス社会学史のなかでの〈プラティック理論〉の位置づけについては, 田原 [1993] がある。
- (5) この認識枠組みは, 1963年の『アルジェリアの労働と労働者たち』ではじめて提示されている。ただし, そこでは「個人的 (individuelles) 期待と客観的可能性」[1963, p.565] となっている。
- (6) ハビトゥス概念が初めて登場したのは, 1964年の『デラシネモン』においてである。「農民の存在は, なによりもまず存在のある一定の様式, すなわち世界と他者の前での不変で一般的な性向であるハビトゥスであるから, 農民が農民としてふるまう可能性をもちやもたない時でも, 農民は農民であり続けることができるのである」[1964a, p.102]。
- (7) 「文化の正統性」の生成については, ブルデューは《場 (champ)》の理論において検討している。《場》の理論については, 別稿で扱いたい。
- (8) ハビトゥスの変容についての指摘はすでに, Pardeise [1989], 吉澤 [1989] がある。
- (9) 『再生産』の段階では, 「文化的事実の純然たる共時的把握 (よく民族学者がとらざるをえないやり方) をめざすなら, 文化的事実はそれじたいの存立の社会的条件, すなわち, その生産と再生産の社会的諸条件にもとづいていることを見落としてしまうはめになる」[1970, p.23/訳書1991, 23頁] と述べられている。〈理論転換〉の完成によって, 文化的事実の「使用の社会的条件」の分析が加わったことになる。
- (10) 「教育システム内部のメカニズム」や「相対的自律性」を分析するにあつ

ては、バーンステインの「〈教育〉装置 (pedagogic device)」論 [Bernstein 1990, pp.165-218] による、ブルデュー理論の批判を参考に  
する必要があろう。

【引用文献】

- 秋永雄一 1987 「現代における『身分』と教育—『文化的再生産』への視角」  
『教育社会学研究』42集。
- Bernstein Basil 1990, *The Structuring of PEDAGOGIC DISCOURSE*,  
Class, codes and control volume IV. Routledge.
- Bourdieu Pierre 1962, “Célibat et condition paysanne.”, *Études rurales*  
No.5-6.
- 1963, *Travail et travailler en Algérie*, Mouton.
- 1964a, *Le déracinement*, (avec A. sayad) Minuit.
- 1964b, *Les Héritiers*, (avec J. C. Passeron) Minuit.
- 1964c, *Les Etudiants et Les études*, Mouton.
- 1965a, *Un Art Moyen*, (avec A. Boltanski, R. Castel,  
J. C. Camboredon) Minuit.  
(山縣熙, 山縣直子訳『写真論』法政大学出版1990)
- 1965b, *Rapport Pédagogie et Communcation*. (avec J.  
C. Passeron et M. de Sanit-Martin) Mouton.
- 1966, *l'amor de art* (avec alain darbel) Minuit.
- 1967a, “Postface pour Erwin panofsky”. *Architecture  
gothique et pensée scolastique*. (三好信子訳「生  
成文法としてのハビトゥス」『アクト』日本エディ  
タースクール出版No. 2, 1986)
- 1967b, “Système d'une enseignement et système de pensée”,  
*Revue internationale des sciences sociale*, XIX,  
3, pp. 338-358.
- 1968, “Structuralism and Theory of Sociological knowl-  
edge”, *Social Research* Vol. 35 No. 4 Winter.
- 1970, *La Reproduction*, (avec Passeron) Minuit.  
(宮島喬訳『再生産』藤原書店1990)

- 1972, *Esquisse d'une theorie de la pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyle*, Droz.
- 1975, "Le titre et le poste : rapports entre le système de production et le système de reproduction" (avec Luc Boltanski) *Actes de la recherche en sciences sociales*, 2, pp.95-107 (森重雄訳「教育システムと経済」『現代思想』No.13-12, 1985.)
- 1976, "Le sens pratique", *Actes de la recherche en sciences sociales*, 1, pp.43-86.
- 1977b, *Outline of a theory of practice*, cambrige.
- 1979a, "Les Trois États du Capital", *Actes de la recherche en sciences sociales*, 30, novembre, pp.3-6.  
(福井憲彦訳「文化資本の3つの姿」『アクト』No. 1, 1986)
- 1979b, *La Ditanction*, Minuit. (石井二郎訳『ディスタンクショ』藤原書店1989/1990)
- 1980a, *Le Sens Pratique*, Minuit. (今村仁司・港道隆・福井憲彦・塚原史訳『実践感覚』1・2 みすず書房1988/1990)
- 1980b, *Questions de Sociologie*, Minuit. (田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店1991)
- 1982, *Ce que parler veut dire : léconomic des échanges linguistiques*, Minuit. (稲賀繁美訳『話すということ』藤原書店1993)
- 1984, *Homo academicus*, Minuit.
- 1985a, "identitié et la représentation", *Actes de la recherche en sciences sociales*, 35. (木下雄介「アイデンティティーと表象」『アクト』No. 4, 1988)
- 1987, *Choses Dites*, Minuit. (石崎晴己訳『構造と実践』藤原書店1988)
- 1989, *La Noblesse d'etat*, Minuit.

- 1992, *Les règles de l'art*, Seuil.
- Carnoy, M. 1982, "Education, economy and the state", Apple, M. W. (ed), *Culture and Economic Reproduction in Education*. pp. 105-126. R. K. P.
- Harker, R., Mahar, C., Wilkes, C. (eds.) 1990. *An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu : The practice of Theory*, *The Macmillan Press*. (滝本往人・柳 和樹訳『ブルデュー入門』昭和堂1993)
- 藤田 英典 1987, 『『階層と教育』研究の今日的課題』『教育社会学研究』第42集
- 久富 善之 1972, 「社会学から『教育社会学』へ—K・マンハイムの場合」『教育社会学研究』第27集
- 1985, 『現代教育の社会過程分析』, 労働旬報社。
- 加藤晴久編 1990, 『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学』, 藤原書店。
- 前平 泰志 1988, 「〈文化資本〉概念をめぐる—『再生産』派教育理論のパラドックス」『季刊クライシス』33.
- 宮島 喬 1985, 「再生産論としての教育論の構造—ブルデュー, パスロンの教育論の視角と論点」『現代思想』vol, 13-12.
- Prost, A. 1970, "Une sociologie stérile: 《La reproduction》", *Esprit*, no. 398.
- Pardeise, C. 1989, "Note de lecture sur 《Le sens pratique》", *Revue Française de Sociologie*, vol. 22, n. 4, pp. 636-642.
- Robbin, D. 1991, *The Work of Pierre Borrdieu*, Open University Press, Buckingham.
- 高橋 一郎 1990, 「文化的再生産論の再検討—『教育科学の社会学』の試み—」『ソシオロジ』35.1
- 田原 音和 1993, 『科学的知の社会学—ジュルケームからブルデューまで』藤原書店名
- 吉澤 昇 1989, 「『歴史の喪失』と『教育の終焉』とをめぐる」東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室『教育室紀要』第15号
- \* 本論文の作成にあたっては、1992・1993年度「文部省科学研究費助成金」

（「教育システムと社会階級・社会秩序の再生産の関連について」）の援助を得た。